

- 1 鶏頭の俄かに声を漏らしけり
- 2 薄明とセシウムを負い露草よ
- 3 桐一葉ここにもマイクロシーベルト
- 4 十方に無私の鰯を供えけり
- 5 秋深し納まる墓を異にして
- 6 手のひらを透かしていたり神無月
- 7 音のなき絶景であれ冬青草
- 8 燃え残るプルトニウムと傘の骨
- 9 放射状の入り江に満ちしセシウムか
- 10 原子炉に近づいてくる鯨どち
- 11 布団より放射性物質眺めおり
- 12 我が死後も掛かりしままの冬帽子
- 13 元日の動かぬ水を眺めけり
- 14 初鏡一本の松深くあり
- 15 大寒の残骸として飼育室
- 16 しばらくは仏に近き葱の花
- 17 生きてあり津波のあとの斑雪
- 18 夕桜てのひらは血を隠しつつ
- 19 夕ぐれのバスに残りし春の泥
- 20 風花の我も陥没地帯かな
- 21 霾るや墓の頭を見尽して
- 22 ねむる子ら眠りつづけて竜の玉
- 23 焦土なる記憶の上に草萌ゆる
- 24 雨の地の頻りにかなし昔蓍
- 25 桜貝いつものように死んでおり
- 26 水吸うて水の上なる桜かな
- 27 地に憩う花びらのあり雨の後
- 28 山鳩として濡れている放射能
- 29 少女また桜の下に石を積み
- 30 教室の家族写真や花曇
- 31 雨が死に触れて八十八夜かな
- 32 朧夜の人の頭を数えけり
- 33 墓場にも根の張る頃や竹の秋
- 34 ふと影を離れていたる鯉幟
- 35 五月雨や頭ひとつを持ち歩き
- 36 西日中灰のごとくに鳩の群
- 37 鬱々と耐えていたりし筒粽
- 38 停電を免れている夏蜜柑
- 39 原子炉の傍に反りだし淡竹の子
- 40 中空を真闇と思う立葵
- 41 夏風や波の間に間の子供たち
- 42 山の蟻路上の蟻と親しまず
- 43 体温や濡れて真黒き砂となり
- 44 ログスから零れ落ちたる柿の種
- 45 音楽を離れときどき柿の種
- 46 ぬっと来てぬっと去りたる鬼やんま
- 47 白桃や聡きところは触れずおく
- 48 菊人形水を隔てているような
- 49 かりがねや毛筆となる言葉たち
- 50 神域を抜けたる鶏の暗さかな

- 75 花疲れ髪を短くしていたり
- 74 身籠れる光のなかを桜餅
- 73 頭から抜けてゆきたる金鳳花
- 72 化野に白詰草を教わりし
- 71 落椿肉の限りを尽くしたる
- 70 永き日や獣の鬱を持ち帰り
- 69 雪解星同じ火を見て別れけり
- 68 白梅や頭の中で繰り返し
- 67 初氷我が名を呼べば還り来て
- 66 獅子舞の口より見ゆる砂丘かな
- 65 若水や陰毛常の艶を持ち
- 64 身の内の水豊かなり初荷馬
- 63 般若とはふいに置かれし寒卵
- 62 海底の火口を思い日脚伸ぶ
- 61 晩婚や牡蠣に残りし檸檬汁
- 60 少しずつ水に逆らい寒の鯉
- 59 寒念仏タコ足配線の先の
- 58 冬銀河肺に溜まりし水のこと
- 57 白菜をゆでている間の襠褌かな
- 56 明日になく今日ありしもの寒卵
- 55 蠟のような耳に触れたる冬帽子
- 54 老犬に従い歩き花八手
- 53 寝違えて冬の日射しの中にあり
- 52 枯蓮の匂う齡となりにけり
- 51 木枯に従っている手や足ら
- 76 滝音に人声混じる落花かな
- 77 春すでに百済観音垂れさがり
- 78 竹の秋地中に鏡眠りおり
- 79 徐に椿の殖ゆる手術台
- 80 菜種梅雨鉄の匂いの腕を垂れ
- 81 遠近の田の細りゆく春夕焼
- 82 水すまし言葉を覚えはじめけり
- 83 初夏のひとりに一つ生卵
- 84 ところてん西へ西へと膨れけり
- 85 天牛は防空壕を覚えていた
- 86 家族より溢れ出したる青みどろ
- 87 鳥葬の傍らにあり蛇莓
- 88 曇天や遠泳の首一列に
- 89 金亀子影を待たずに転げ落ち
- 90 蛇莓少し汚れて摘まれけり
- 91 鬱々と愛されし日の心太
- 92 みな西を向き輝ける金魚の尾
- 93 黒南風の松を均していたるかな
- 94 天牛の眼が遊び始めたる
- 95 少女また羽蟻のように濡れており
- 96 金魚玉死んだものから捨てられて
- 97 水風呂に父漂える麦の秋
- 98 壮年を松葉の影と思いきり
- 99 山蟻を遊ばせている腕時計
- 100 その後の裁きを知らず羽抜鳥